
コウノトリの置き土産

ふじ ぷらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コウノトリの置き土産

【Nコード】

N9436G

【作者名】

ふじ ぷらす

【あらすじ】

寒い日に帰宅したサラリーマンの遠山智弘。ところが帰宅してみると、玄関の扉の前に段ボール箱が置いてあった。その中には、野菜ではなく、とんでもないものが入っていて……。

1. お届け物です

ブオオーという唸り声を上げて、タクシーは寒い暗闇の中へと進んでいった。遠くのほうで赤いランプが光ったのが見える。それを確認すると、さっきまで乗客だったサラリーマンである遠山が、自室までのほんの少しの距離を歩き始めていた。

「ふいー。寒い寒い・・・」

そんな声を北風のごとくびゅっと噴出したときに、顔の前は白で覆われた。これも、この寒さを物語っている。

遠山の家は、6階建てのマンションの6階。

タクシーを降りてからも、地獄のような寒さの中しばらく歩いて、さらに最上階までエレベーターの中で縮こまらないといけない。

コロコロコロコロ

空き缶が、遠山がさっきまで足を置いていたところを転がっていた。

「ううう・・・」

風が身にしみる。その証拠に、体は普段の8割程度の大きさにまで縮こまっているような感覚がしていた。

遠山は、毎日、自分が帰る頃に部屋が暖まるように、石油ファンヒーターのタイマーをセットして出勤していた。今日も、誰もいないくらい部屋の中で、石油ファンヒーターがゴォゴォと声を出しながら、赤と青の炎をちらちらとちらつかせて、主人の帰りを待っているのだろう。

遠山は、こんな機械的なものよりも、人間味のある、というより、人間、待っていてくれる人が欲しいのであったが、もう今年で35歳となって、そろそろ諦めかけていた。

やっこのことで辿り着いた自動ドアがビュウィンと今か今かと自

分の番を待っていて、待ってましたと言わんばかりに勢いよく開いた。それと同時に、マンションの中につめたい風も遠山と一緒に入ってきた。

遠山はオートロックを解除する鍵を取り出すために、黒い手袋を加えて、ピッと脱ぐと、その辺りの冷気が一斉に牙をむいて、無防備になった遠山の手を襲った。

鞆の中から取り出した鍵はすでに、やられていて、死んでいるような冷たさだった。

その鍵でも、ちゃんとオートロックは開き、2番目の自動ドアが無事に開いた。

そこからは、空調が整備されているからだと思うが、包み込むようなほのかな温かみがあった。芳香剤が香ってくるのもそれに拍車をかけているような気がする。

「はぁー」

遠山は、今日一日の疲れを、ここで一旦、体からそぎ落とした。

トコトコトコ

と、歩く音だけが、大理石のような石で作られているロビーの中を木霊する。リズムよく、テンポよく、心なしか早めの。

エレベータの手前につくと、遠山は、エレベータを呼び出した。

そいつはすぐそこにいたようで、ドアを開けて、遠山を招き入れた。エレベータの中は一層暖かかった。狭い空間では、冷たさの軍勢が、人間の技術による、暖かさの軍勢に押されてしまうようだ。でも、少し暑いくらい。長時間個々に居たら気分が悪くなってきそう

だ。
でも、そんな心配は無用で、数十秒後には最上階で再び扉が開いた。開いた扉から一斉に冷気が攻め込んできて、遠山も巻き添えにし、狭い空間を支配しようとした。争いが始まった。冷気軍と暖気軍の激しいせめぎ合い。遠山は、どう見ても冷気軍が優勢であるよ

うにしか見えなかった。エレベータの中の風向口から送られてくる援軍は、とてもじゃないけれど、外から送り込まれる冷気軍に対処しきれていなかった。

この光景が、夏になったらそれぞれの陣地が逆転しているものだから面白い。

遠山が、その空間から脱出すると、自分を守るためか、エレベータは扉を閉ざし、中に入る冷気の小数と暖気の多数で支配合戦が始まった。今度は暖気軍が三日天下。下に降りつくまで。

遠山の部屋は、6階でエレベータを降りてからしばらく歩いていかなければならなかった。それでも、購入のとき、遠山はここを好んで選んだのだ。眺めがいいから高かったので今更文句も言えない。また、言う相手もない。

トコトコトコ

今度は、6階の廊下を足音が木霊する。

遠山は、さっきの鍵を再び取り出した。この先の角を折れたところに部屋がある。もう少し。これで、この戦場から離脱できる。

夜だというのに、白い電球がさんと光り輝いていて、この先の曲がり角の先に誰かが隠れていて脅かそうだったって、効果は暗いときのその半分ほどになってしまっただろう。かつての恋人は、遠山の帰りを待ちわびて、そろそろ帰ってくるというときにこの悪戯を仕掛けたが、遠山の前を歩くお隣さんを脅かす羽目になったという恥ずかしい失敗に終わっていた。

それ以来、ここで誰かが脅かそうだったって、笑ってしまうかもしれない、とすら遠山は思っていた。

そんな相手はもう今はいないのだが。

角を曲がって、部屋の扉が並ぶところが見えたところで、ダンボールがひとつ置いてあることに気づいた。

「ん？」

寒さで完全に遠山の脳は思考活動を停止していたが、今、呼び起こされた。それでも、ちょっとぼんやりとこの状況がのめないでいるのは、脳が毛布に包まって「あと5分」とでも言っているからだろう。二度寝も持さない覚悟だと思われる。5分も待たなくともすぐに暖かいところへ入れるわけだが。

ダンボールを発見してから数歩歩いて気づいた。

そのダンボールは遠山の部屋の前に置かれている。黄色くて、形はしっかりと整っていて、そんなに汚れていない。新しいものだろう。

「宅配便か？」

ぼそっとつぶやいたが、そんなことはまずありえない。1階のロビーのところにある宅配ボックスに入っているのが普通。それに、もしそうでないとしても、他人の家の玄関で荷物を放置していくような宅配業者がどこにいるか？

遠山は、ちょっとは不思議に思ったが、ゴミだったら捨てればいいだけ、くらいしか考えが及ばない。いよいよ脳が二度寝を始めた。鍵についたキーホルダーをちゃらちゃら言わせながらダンボールに、いや、部屋のドアに近づいていく。

ドアの前に立ち止まって、鍵をさしたときに、ついでに、そのダンボールの中を眺めた。

「へっ！」

脳がどんな指令を出したらそんな遠山がするのかというような音を出した。これも、二度寝していて急に起こされたからだと思う。

そのダンボールの中に、白菜、キャベツ、人参、大根、小松菜、馬鈴薯などが入っていても十分驚いていたかもしれないが、これはどうにも驚きのゲージを振り切ってしまったような感じだ。

毛布に包まった、赤ちゃん。犬でも猫でもなければ、ハムスターでもない。だったら、ひよこでもなければ、パンダでもない。これはどこからどう見ても、サル、いや、人間の赤ちゃんだった。

「え？ あ？ ん？」

混乱に陥ると、「なんで？」と言うような悠長な言葉は口から飛び出さない。

その言葉が出ようとするところを肩をつかんで後ろに張り倒し、単音が飛び出てくるのだ。それも、文字では書き表せないような。

寒さのせいもあったろうか、遠山はしばらくそこに凍っていた。

もう、錠は解いたのだから、暖かい部屋に入るだけ。

でも、凍ったら解凍しないと動かない。

自然解凍はしばらくしそうにない。

でも、遠山は凍ったまま、扉を開いて、足で外開きの青い扉が閉まるのを抑えたかと思うと、ダンボールを抱え上げ、部屋の中に入れた。

重さは4キロほどだろうか。

遠山は、仕事はコンピュータをいじるばかりなので、コンピュータの本体がちょうどこれよりちよっと軽いくらいだという見当くらいはつく。いや、実際、コンピュータはそこまでも重くないのだが、普通の宅配便なら、ドスンと置くところであるが、今回ばかりは、取り扱い注意の見えないシールが貼ってあったからゆっくりと玄関に下ろした。

「はぁー」

さつきロビーでこぼしたばかりのため息を再びこぼすことになってしまった。

遠山は、しばらく玄関でダンボールの横に腰掛けてじっと中を覗き込んでいた。

赤ちゃんは男か女かは顔だけではわからない。

でも、ちゃんとぐっすりと眠っている。

自分の置かれている状況なんて知る由もなく。

遠山は、二度寝した挙句、寝ぼけている脳でもってさえ、この状況がわかる。

この子は、

「捨てられた・・・か・・・」

こんなことは他人事だと思っていた。

しかしながら、世間は狭いもので時にエレベータほどの広さしかない。

「ん・・・」

ワイドショーでは赤ちゃんを拾ったらどうすればいいかなんて対応策を紹介してくれなかった。もちろん会社でもらったマニュアルにもそんなことは載っていない。あれだけ小さな字でこと細かく書かれているのに。

数分間そこでじっとしていると、玄関のドアの隙間を通して冷気が侵攻してきていることに気づいた。

「ああ、いかんいかん」

黒い革靴を、スルツと脱ぐと青いスリッパに履き替え、そのダンボールを持ってリビングルームに持って行こうと持ち上げた。

ゆっくりゆっくり、ダンボールは離陸した。

どこかで拍手の音が聞こえた、・・・気がした。

今日はどうかやら気流が安定しているようだ。

お酒の量を控えておいてよかったと、遠山はちらりと思った。

離陸に成功したダンボールは、順調にリビングルームに向けて飛行を続けていた。ゆっくりゆっくり、遠山は足を半ば擦るかのよう歩いた。武道だとちょうどこんな感じだろうと武道をやったことのないのと思う。振動をちょっとでも加えたらゆっくりお休み中のお客様を起こしてしまうかもしれない。エコノミーのものではある

けれど、お客様の眠りを邪魔をする権利は遠山にはない。

ダンボールを腹に押し付け、片腕をまわして、ダンボールを抱え込む。これがもし古いダンボールだったらつぶれて大変なことになっていただろう。

整備はきちんとしておかないと。

空いたほうの手で、リビングに通じるドアノブに手をかけて、ゆっくりと回す。

ここはひょっとしたらゆっくりまわす必要はなかったかもしれない。

ドアの隙間から暖かい空気が流れ出していた。

そして、ドアを開けたときに、遠山とダンボールとその乗客は、ふわっとした暖かさに包まれた。

たえそれが人工的な暖かさであっても、人情さえ感じられるほどだった。

遠山は、さっさと部屋の中に入ってしまったおうと、ちょっと急いだ。別に急ぐ理由なんてなかったはずなのに、そうしてしまった。

ガンッ

壁にダンボールが接触した。

バランスが悪い状況だったから、冷やりとしたが、墜落することはなかった。

いやいや、もっと冷やりとすることがある。

外の空気もちろんそうだけれど、この振動を乗客が感じないはずがない。

最悪の場合、乗客は目を覚ましてうるさく騒ぎ立てるだろう。こちらとしては謝ってもそれは解決できない。

「ほっ」

本当にこんな言葉が口から出た。
普通、もっとも出てきそうにない言葉だ。

乗客は、なおもすやすやと寝ている。

「ん？寝ている・・・のか？」

次に不安が訪れた。一難去ってまた一難。秋の台風のようなだ。

そっとリビング中央の赤い絨毯の上にダンボールを置くと、遠山はダンボールの中に耳を近づけた。

ゴーゴーゴーという音が聞こえる。

石油ファンヒータの音だ。

さらに顔を近づけてみた。

すると今度は、スースースーという定期的に抑揚を繰り返すエア音が聞こえてきた。

「よかった・・・」

普段なら自分の部屋で、誰もいなくても比較的大きな声で独りごつ遠山であったが、今回ばかりは、小さな声だった。

独り言が増えてきたからそろそろ歳なのかもしれない、と遠山は最近思い始めていた。

2. これウチにですか？

「どうしよう」

テレビもつけられず、暖かいココアを入れて、リビングのテーブルに置いた遠山がぼそりと言った。

なんだか拍子抜けしてしまって、さっきまでほろ酔いでいい気分だったのに、すっかり冷めてしまっていた。あとで、冷蔵庫にしまつてある芋焼酎でも温めて飲もうと決心した。

即席で作った暖かいココアを冷え切った体に流し込み、細胞の解凍を終えた数分あと、遠山は、一瞬考えて電話を手にとった。

「あ、すみません。実は・・・」

遠山は、この短い経緯をゆっくりと説明した。別にそれは相手に聞きやすいであろうと配慮したのではなくて、ぼそぼそと呟くような声で、赤ちゃんを起こさないようにするためだった。

ここをしくじったら遠山はどうしようもない。

赤ちゃんを手元に置いた経験など全くないからだった。

十数分経って、インターフォンの受ける側の音が鳴った。

遠山は、その音に、びくついたが、赤ちゃんはなおも寝ているようであった。

「あ、はい、ご苦勞様です」

インターフォンにそう答えて、再びダンボールのところに戻ってきた。

「可哀想になあ」

どこに我が子を捨て去る親がいるのかと、例え、世間がエレベータほども狭くなかったとしても信じられない。

でも、遠山は、可哀想とは思ったが、赤ちゃんが可愛いとは思わなかった。

そもそも、そんなに子供は好きではなかった。

会社に時々同僚の息子・娘が来ていることもあったが、そのときも扱いに困った。

「そもそも、どうして子供を会社に連れて来る？」

という問いに奴は

「休日出勤だから良いだろ？」

とさりと答えた。そんなにあっさりと言われると

「ああ、まあそうだな」

くらいしか答えられないじゃないか！と内心苛立ったのがちよつと懐かしい。なぜだろう？

ところで、子供の扱いに・・・と表現しているところからして、ダメだと自分を責めてみるが、やっぱりどうしようもない。苦手なものは苦手なのだ。

ピーマンが嫌いな子供に口にピーマンを押し込んだって吐き出してしまうのと同じだ。

数分後、今度は玄関のベルが鳴り、遠山は、足音を立てないように玄関へ向かった。

扉を開けると、そこには優しそうな、遠山よりも倍くらいは歳をとっているだろうと思われるおじさんと、中年の”お姉さん”が居た。

「こんばんわ」

遠山から会話を始めた。

「最近多いんだよ。ほら、ニュースとかでもよく見るだろう？真似する人が増えたってのかね？本当に、無責任だよ。どうせ真似をするならもつといいことを真似すりゃいいのに」

あんたには関係ないだろうけどね、とおじさんは付け加えると、ポケットから二つ折りになっている財布のような手帳を取り出して、二人はそれを遠山に見せ付けた。

水戸黄門もきつとこんな感じだろう。

その手帳は、黄色い紋様がついていた。

黄門様のものとは、ちょっとデザインが違うようであったが。

「上がらせてもらってもいいですか？」

「ええ、もちろん」

「ありがとうね、あんたも、とんだことに巻き込まれてしまって、
疲れたろう」

そんなことを呟きながらちゃんと靴を脱いで部屋の中に上がってくれた。

でも、この状況。土足で上がられても、そのまま通していたかもしれない。

ずっと、預かったままにしておくには重すぎる荷物だから。

お隣さんのお歳暮のハムを預かって、どうしても食べたくなってしまうのとはちよつとワケが違う。

遠山は、二人を静かにリビングルームに案内した。

”お姉さん”のほうは、手のひらでダンボールを指し、「あれですか？」と小さな声で尋ねた。遠山が頷くと”お姉さん”は、さささと歩み寄り、中を覗き込んだ。赤ちゃんを見下ろす目はどこか暗かった。

おじさんのほうは、遠山の腕を軽く引っ張ったり、そのままりビングルームの外に出た。

「それではウチで預かりますんで」

「あ、はい、お願いします」

おじさんはなんとも手馴れた感じに話を切り出した。それだけこういうことが頻繁に起こっているということだろう。

しばらく、”お姉さん”が赤ちゃんをじっと見ているのを二人は少しはなれたところで見ていた。そこは、沈黙が支配し、部屋全体の石油ファンヒータを除けば静寂になる世界に加担していた。

そんな沈黙をやぶったのは、遠山であった。

「この子はこの後、どうなるんですか？」

別にこれをどうしても知りたかったわけではなかったけれど、沈黙の時間に耐えられなくなったのだった。どうせいつも1人で暮らしているから静かな部屋ではあるけれど、客人が来ているのにこんな状況は、さすがにひっかかった。

「ん、そうだな。とりあえず、この子の親を探すんだが」

そこでおじさんは、ちよつと言葉を切って朝剃ったと思われる髭が再び顔を出している顎をさすった。

「見つからないことがほとんどでな」

おじさんの声は、赤ちゃんのためにというよりも、話の内容のために静かだったと思われる。

「それじゃあ・・・」

「施設に送られるよ。そこで、大切に育てられる。社会に馴染むことが出来るようになる」

「そうですか・・・」

「施設の中で暮らしていて幸せになれるかも知れん」

おじさんは聞いてもいないがどんどん話を始めた。本当は、誰かと話をするのがとても好きなようだった。

「養子をもらいに来た人たちが連れて行ってくれることもあるが、それがその子にとって幸せとも限らん。どの道・・・」

またおじさんは、間をおいた。

「あまり幸せになれない、と？」

遠山は、待ちきれずに聞いた。おじさんは、そうかもしれないが、それはその子次第だと言って、その後低く笑いながら

「ま、あんたには関係ないことだ」

と言い、肩をポンポンと叩いた。

それに対して、遠山は怪訝そうな顔をした。

おじさんは、それを感じ取ったのだろう。

「お前さんが引き取るわけじゃないだろう？だから、忘れな。後は

社会に任せればいいんだ」

社会がダメだからこんな風に子供が捨てられるんじゃないか？という言葉が遠山の口をこじ開けようと必死だったが、筋肉が、理性が、本能がそれを阻止した。

おじさんは、ドアを片手で支えて、赤ちゃんを抱えた”お姉さん”を先に通した。

「それじゃあ、迷惑かけましたな」

と、微笑、苦笑でボタンとドアを閉めて去っていった。

リビングルームにはさっきまで赤ちゃんが入っていたダンボールだけが、仄かな温もりを持って佇んでいた。

3. あれ！違いますか・・・？

時間は、一応、世の中を平等に流れているようで、この遠山にも以前と変わらぬ朝がやって来た。

昨日は、少し寝付けなかったが、気がついたら寝ていたらしく、ピピピピッと目覚ましが鳴って、朝7時に起床した。それと同時に、タイマーがセットしてあった石油ファンヒーターもファンを回して動き始めた。今朝も結構冷え込んでいるが、直に部屋は暖くなるだろう。

今日も平日だから会社に行くことになる。朝食は、トーストとコーヒーというシンプルなもので、いつも新聞を取りにいき、朝のニュースをテレビに映してから食べ始める。

遠山は、無意識に昨日の出来事についてのニュースがないかどうか、新聞とテレビを行ったり来たりしているうちに、コーヒーが冷めてしまった。

コーヒーを口にしたときに冷たいことが分かり、はっとして緑の光のデジタル時計を見ると、もう起きてから1時間も経っていることを示していた。

「やばっ」

遠山は目の前の朝食を掻き込み、身支度を整えて、ネイビーのネクタイが曲がったままの状態で家を飛び出した。

無事に会社に時間までに着いたが、これがゴールではなくてスタートであることは言うまでもない。

最近、遠山はコンピュータの非人情的な画面を覗き込みながらよく思う。

「誰のために働いているのだろうか？」

数年前に両親は続けて他界。二人も揃って癌だった。

いつかはこんな時も来るだろうと心構えをしていたために、ダル

マのごとくすぐに立ち直ったが、虚無が残ってしまったのだった。
「次の会議の資料が出来上がりましたので見ていただけますか？」
と、今年新しく入ってきた女子社員が可愛い仕草で、紙束を持ってきた。

遠山の机の上には、部長を示すプレートが名ばかりに置いてある。
「ああ・・・」

遠山は、ボーっとした声で紙束を受け取って、きれいに片付いている机の上にポンと置いた。

それを見た女子社員は、一仕事終えたという感じで、肩の力をドスツと抜いて自分の席へキャピキャピと戻って行った。

遠山は他の仕事をしていたわけではないので、すぐにその紙束を再び拾い上げ、ホチキスで止められた左肩を頼りに、ぱらぱらと捲っていった。

会議の資料としてはそんなに枚数も多くなく、見るのもそんなにしんどいとは思えなかったのだが、どうにも今日はぼやけて見えない。
「そろそろ、老眼か・・・」

とか、いつもなら呟くところだが、今日はそんな余裕もなかった。

ぱらぱらと捲っていたかと思うと、全部閉じて、元のようにした後、ポンと机の上に置いた。資料がよく出来ていたか、そうでなかったかの判断はつかなかった。

遠山は、午前中は自分の席にじっと座ってパソコンの画面でなにやら作業をしていたのだが、目は座っていなかった。どこでもない、何もないところをただ、ぼんやりと眺めて、時間が過ぎるのを待つでもなく、時間を悪戯に過ごしていた。

気がつけば、昼を告げるチャイムが鳴っていて、昼休みになっていた。

机の上で愛妻弁当を広げる者。まだ作業を続ける熱心なもの。急いでタバコを吸いに喫煙ルームまで走るもの。社内で人気の弁当を買いに行くために高そうなブランド物の財布を持って行く一部の女子社員。

遠山は、いつも誰にも誘われることなく、独りで食堂まで行くことが多かった。

そこで、他の部の部長らと顔を合わせたら最後、仕事の話しかない。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうようで、ぞろぞろと名残惜しそうに、オフィスに社員が戻ってくる。

遠山は、昼食を幸いにも誰にも会わず独りで済ませた後、自分の席で、さっきの会議の資料を眺めていた。さっきは気づかなかった誤字が見つかったことから、遠山はいつもの調子を取り戻しつつあるような気がしていた。

また、会議資料をポンツと机の上に置くが早いか、午後からの始業のチャイムが鳴り始めた。

早速、会議資料を作成した女子社員を呼び出した。

「ここ字が違ってる。直しといて。後は問題ないから」

「はい」

機械的な返事をして、資料を持って自分の席に戻っていった。

プルプルプルプル

手元の電話が鳴った。どうやら直通の内線電話のようだった。

「はい」

「あ、はい」

「えっと、すぐにですか？」

「あ、わかりました」

返事をするごとに遠山の声が慌しくなっていた。会社の運営して

いるコンピュータのサーバに不具合が起きたらしい、とのことだった。複数人で復旧に当たるのだが、それに加勢してくれとの要請が現場からあったため、遠山は、走るまでもないが、足早にホワイトボードのところに行き、サーバ室というマグネットを自分の名前のところに貼り付け、オフィスを出て行った。

結局、その作業が終わったのは、終業時間だった。

それでも、遠山は自分の席に戻って、自分でコーヒーを淹れて、自分が留守にしていた間に机の上に積まれていた確認資料などに目を通すこととなった。

オフィスの明かりは節電と称して消されたため、自分の席の上の蛍光灯だけが一緒に残業をすることとなった。

「まあいいか、明日は休みだし」

一応、週休二日は会社の中で守られるようで、よっぽどの仕事がない限りは、休むようにとの通達が来ていた。もちろん、会社側としては、休日出勤の手当てを出さずに済む。でも、週休二日を完璧に守っている人間はいない。サービス出勤とやらは常習化している。例の子供を連れてきた奴もその類だ。

結局、ちょっと残業しても仕事が終わらないこともしばしばで、そのときは自宅に持ち帰ってやるが多かった。これは情報漏洩などの観点からも褒められたものではないことは分かっていたが、どうせ家に帰ってもやることもあまりなかったので、遠山はそれでもよかった。

シュカシュカと紙を捲る音だけがただっ広いオフィスで響いている。手元にあるコンピュータは、休憩しているようで、音も立てずに、画面に不思議な模様を連続的に変化させながら映している。黄、赤、緑、紫、青、・・・と色々な色で織り成す造形。

帰宅したら午後10時だった。それでも、今回は仕事が少なかつ

たから、明日と明後日は仕事のことを考えずに過ごせそうだった。ただ、遠山の頭はほぼ完全に仕事をする事のために働くようになっていたから、いきなり休日を与えられたところで、寝て過ごすか、DVDを見るかくらいしか、過ごす方法がなかった。

あまり親交のない同僚の社員は、夫婦でゴルフに出かけるだの、家族で遠足に行くのだのと、楽しそうなことばかりを報告してくる。誰も、家でDVDを見て、その感想を話して聞かせる人などいない。この日は、結局、夕食は外のラーメン屋台で済ませていたため、後は寝るだけであった。

ところが、いつもなら動いているはずの石油ファンヒータのボタンが赤く点滅している。

近づいていって覗いてみると、どうやら燃料切れを起こしたらしい。

仕方がないから、灯油を入れようと、ポリタンクのところまで容器を持っていったが、ほとんど入っておらず、今晚が精一杯だと思われた。

次の朝。寒さに震えながら、朝日を浴びて遠山は起きた。部屋の中で吐いた息すらも白くなったように見えた。

小学生が土曜日や日曜日に遊ぶぞ！と意気込んで日曜日にもかかわらず6時くらいに起きてしまうのと少し違うが、別段、何もすることもないにもかかわらず、朝7時に起床した。この小学生がだんだんと大人に近づくにつれて休日は寝坊が出来る日であるということを知っていくのである。

石油ファンヒータは、再び赤いボタンを光らせていた。早く自分に気づいてくれと必死にアピールしているようだ。

電気ヒーターを取り出してきて、コーヒーを淹れて、トーストを

焼く。こうして遠山の土曜日が始まった。

トーストにバターを塗っているときにやけに部屋が静かなのに気づいて、テレビのスイッチを入れようとリモコンを探した。

リモコンはここに入れようと、リモコンホルダーなるものを買って来たのにもかかわらず、リモコンはいつもそこから外出しているのだった。近くにホワイトボードがあって、行き先などを書いていてくれると本当に助かるのだが。

こういうときは、リモコンを探すよりも、テレビに直接歩いて行ってスイッチを押すほうが早い。そもそも、リモコンが見つかったところで、主電源が切れていたらいくら電源ボタンを押したところで、テレビは動いてくれない。

テレビでは、土曜日にしかやっていないニュース番組をやっていた。こういう番組は、一週間のまとめをしているか、何か美味しいものの紹介とかをしていることが多い。

そんなテレビを見るでも見ないでもなく、少し冷えてしまったコーヒーをズズズと飲みながら、部屋の寒さを肌で感じていた。

背後では電気ヒーターが橙の光を放って、局所的に暖かさを演出している。

溜まっていた洗濯物を片付け、そんなに汚れていない部屋の掃除を終えると、急に暇になってしまった。

こんなときは大体パソコンに向かっていることが多かったのだが、今日はなんとなくそんな気分にならなかった。

なにか忘れているような、心にぽっかりと空洞が出来たようなそんな焦りともとれなくもない変な気分だった。

結局、家の中のソファにどっぷりと座って、テレビを眺めていた。そんなにテレビを見る時間もないのに、数ヶ月前に薄型で大画面の液晶テレビを購入していた。液晶テレビは、ニュース番組のアナウ

ンサーの顔の凹凸の影までしっかりと映している。

そのアナウンサーが次のニュース原稿に移った。

「赤ちゃん、また置き去られる」

そんなテロップが出てきた。

そのニュースの内容は具体的に、どこで起きたかということとは紹介していなかったが、どこその県で何人置き去りにされたかをグラフで表していた。見る見るうちに県を中心付近を始点に持ったグラフは点に向かってのびていつている。ぐんぐん伸びて行き、やがて止まった。

ニュース原稿は少し長いようで、まだまだ続くようだった。

ときどき、出演しているコメンテータに意見を求めて、その人物が腕を組んで偉そうに、難しそうなことをつらつらと並べていた。

遠山は、その様子を、始めはボーっと何も宿らない目で見ていたが、グラフが終点に達した頃だっただろうか、急にぬくつと立ち上がって、携帯電話をすぐ側のハンガーにかけてあるスーツの上着のポケットから取り出した。

開いてみても、誰からも電話があったわけでもないし、メールが来ているわけでもなかった。遠山にそんなことをしてくる相手は仕事の内容でしてくる人くらいで、友人は、それぞれの家庭があつてそれどころではなかったらしい。

遠山は携帯電話を持ったま、60センチほどの高さの木で出来た本棚の上においてある、名刺を手にとった。名刺は昨日、おじさんが去り際になぜか遠山に渡したものであった。

その名刺には、おじさんの名前と、電話番号、メールアドレスが書いてあった。

仕事柄、こんなものは度々もらうため、そのときは、どうして渡してくるのかそんなに気にもしなかった。ごく自然なことに思えたからだろうか？それとも別の理由だろうか？

とりあえず、その電話番号を携帯電話に打ち込む。携帯電話は言

われたとおりの番号を液晶画面に表示し、最後に通話ボタンが押されると、遠山の耳元で呼び出し音を鳴らし始めた。

「あ、すみません。服部さんですか？昨日の者ですが」

「ああ、遠山さんだね？」

昨日のおじさんの声がかかってくるのを待っていましたと言うかのように聞こえてきた。

「ええ、はい」

「昨日の赤ん坊のことだね？」

違和感がないが、おじさんは遠山に敬語を使おうとはしなかった。でも、遠山もあまり気にならなかった。

遠山は、おじさんの問いに、そう・・・です、とちょっと詰まりながら返事をした。

すると、おじさんは、一通りの出来事を話してくれた。

あの後、”お姉さん”が一晩、警察署内で見守っていた。彼女は、自分の子供もいるのだが、もう、すっかり大きくなってしまっ手がかららないからと夜通し付き添うことが出来たのだそうだった。そして、今朝、施設数件に電話を入れて、OKが出たその中のひとつに赤ちゃんを送り届けるために、さっき署を出発したとの話だった。

「親は見つからなかったのですか？」

「それはまだこれからだけど、赤ん坊の家出人搜索願いなんてあるわけがないから、ほとんどの場合、捨てた親は見つからないな」

「そうですか、それじゃあ、やっぱり施設に」

「あんた、遠山さん、そんなにあの赤ん坊が気になるんかい？」

「ええ、まあ。あの出来事があってなにも考えるなっなのは難しい注文ですよ」

「そりゃそうかもしれないがな・・・」

しばらく、うーんという唸り声が携帯電話越しに聞こえてきた。

「あんときも言ったが、あんたには関係ないんだ。引き取るっての

なら別だよ？あんたは、収入もしっかりしてるし、子供が好きだつてなら引き取ることも可能かも知れん。ただ、あんたにや仕事もあるだろう。勝手に調べさせてもらって悪いが、あんたまだ独身のようだな。さっさといいい嫁さん見つけな」

それじゃあな、と言って電話が切られるだけの状況だったところ
で、

「あ、ちょっと待ってください」
と、電話を繋ぎとめた。

「ん？」

「その施設の場所と電話番号を教えてくださいませんか？」

「なんだい？まさか引き取るんじゃないかな？」

「わかりませんが、お願いします」

おじさんは、引き取るのならこれからどんな責任が生じるかをしつかり考えて、考えて、考え抜いた上で引き取りなさい、と言って、さらっと施設の場所と電話番号を教えてくださいました。

遠山がそれにお礼を言うのと、相談なら乗ってあげるからと馴れ馴れしくおじさんが言って電話が切れた。

4. ウチのかな・・・？

おじさんに電話をした、その日の午後、バスに乗って早速その施設へ向かった。赤ちゃんを引き取る覚悟が出来たかどうかということはなしにして、とりあえず行くことにしたのだった。どこかへ適当に理由をつけて出かけないと暇で死んでしまいそうな気がしなくもなかったということが正直な理由なのかもしれない。

受付のようなところで、二十歳くらいの女性にワケを話すと離れたところから見ただけならいいと許可された。でも、遠山もそれで十分だった。抱き上げたり、あやすたりするのはもちろんのこと苦手であるから。

きっと昨日の赤ちゃんだろうと思われる赤ちゃんは、ベッドの中ですやすやと眠っていた。他の赤ちゃんは、笑っているか、泣いているか、寝ているかのどれかをしているだけ。その間を高校生くらいの女の子と大人の男性が行ったり来たりして、面倒を見ている。

「こんにちは」

不意に後ろから声を掛けられて振り向くとそこには笑顔があった。園長という名札がついたおばさんは底抜けに明るい感じであった。きっと子供が好きなのであろう。

「あ、こんにちは」

「あなたの家の前にあの赤ちゃんが捨てられてたんですってね」
オブラートに包まないといげとげした言葉が発せられた。

「ええ、まあ」

「今日は、どうしてこちらへ？」

「いや、その、赤ちゃんが気になりました」
暇だったからとは口が裂けてもいえない。

「そうですか」

「最近、ニュースとかでも多いですよね？」

「ええ。赤ちゃんだけでなくて、ここに子供を連れてくる親もいます。大人の都合で子供に辛い目をさせて、まったく・・・」

お婆さんは、目を細めて、女の子が赤ちゃんのオムツを換えているところ辺りをぼんやりと見ていた。じつと、そこに穴を開けてしまふかのようにしばらく見つめていた。

「あの」

程よい間をおいて遠山は切り出した。

「この子供達を養子にしていく人がいるという話を耳にしたのですが」

「ええ、身元、収入などを調べて、大丈夫だと認めた後に、子供が領いたら成立といった感じですね。この子達は親が居ない、もしくは居ても縁を切られたもんだから、よっぽどでない限りは首を横に振りませんけどね。やっぱり子供には親が必要なんですよ」

ここでお婆さんは一呼吸置いた。スーッという鼻息が聞こえてきた。

「この間も、奥さんが子宮癌で子宮を摘出したために、子供が産めなくなってしまうって、ここから2歳の女の子を養子にされましたね」
癌という言葉聞いたときに、一瞬、両親のことが頭を過ぎったが、過ぎただけだった。

「そうなんですか」

「それももちろん大人の勝手といえば勝手なんですけど、子供達が満足すればそれが一番いい形だと思うんですよ」

「なるほど」

遠山は、言葉だけでなく、本当に心から感心していた。

「あなたはあの赤ちゃんが気になるとおっしゃいましたが、そういう意味で気になるのですか？」

「そういう意味？」

遠山は、聞かなくても分かる部分にあえて質問を加え、自分に考える時間を与えた。

「引き取るということです」

心構えは出来ていたが、やはり、背中から体当たりを食らった気分だった。遠山は、ここに来るバスの中でも、もちろん、このことについて考えていた。

バスの窓の流れゆく風景に睡魔が誘われ、遠山に襲い掛かってくるのが何度もあったが、やはり、結論を出さずにはこの施設に足を踏み入れられないとダイヤモンドよりも固く決意していたため、ずーっと考えていたのだった。

「確かに、服部さんの言うように関係ないのかもしれない」

服部というおじさんの言葉がぐるぐると頭の中を巡っていた。

「私は、引き取りたいのは山々です」

遠山は、自分で言った言葉が不思議で仕方がなかった。

この遠山の発言は、施設の中の廊下を駆け回った。無邪気な子供みたいに、廊下を端っこまで走ったらユーターンして、階段を登り、2階の廊下を駆け巡る。

「それじゃあ」

「ですが、私は、独り身です。仕事も残業が多く、引き取ったところで面倒を見ることができません。時間がないと思うんです」

お婆さんは、さっきの明るい発言を聞いたときには、笑顔で溢れていたのだが、今度は、顔に、一気に暗いところに突き落とされた気分になりました、と書いてある。

「そうね・・・」

とだけを口からこぼした。

「ですが」

遠山は、切返した。お婆さんの表情は、次は驚きが変わった。

「勝手なことを言っているのは分かりますが、ベビーシッターをつけて・・・」

そこまで言って、言葉に詰まった。自分で十分何を言っているの

か、それが何を意味するのかを理解して、噛み締めているようだった。

やっぱりおばさんは、再び顔に影を作ってしまった。

「勝手なことは分かっています。私の都合で。確かに、ベビーシッターをつけておくくらいならここで暮らしたほうがいいかもしれません。ですが・・・」

遠山は、ちょっと熱くなっていた。どうしてここまで熱くなっているのか自分でもよく分からなかった。でも、その熱さは、おばさんに空気などを介さずに直接届いているかのようだった。

「運命を感じるのです」

そう、これが遠山がバスの中で出した答えだったのだった。遠山は何度も何度も頭の中で子供を引き取ったときのことをシミュレートした。どれだけの苦労があり、どれだけの困難があるか、それも全部考えた。考えに考え抜いた。バスの中の時間だけでは短かったかもしれないが、それでもちゃんとした結論に辿り着いたと思っていた。

「そうね・・・」

おばさんは、また同じことを呟いた。でも、さっきの沼地に石を投げ入れるような感じではなく、綺麗な川を眺めながらという感じだった。声の調子が違う。

「それに、私は、ベビーシッターが全くの他人ならこんなことをしようとは思いませんでした。私の姪っ子がベビーシッターを引き受けてくれます」

「無理にそうしたのですか？」

おばさんは、で尋ねた。

「いいえ、彼女はしばらくベビーシッターの職を探していたのです。昔から子供が好きでしたから」

かなりの沈黙の時間が流れた。

本当にこの場の時間が止まってしまったかのように二人ともピクリとも動かない。

子供達の無邪気な声だけが聞こえてくる。

ややあって、お婆さんは一旦口を開きかけ、また、閉じる。それを何度か繰り返した後にこう言った。

「あなたのおっしゃることは分かりました」

遠山の顔に、光が灯った。

「ですが」

お婆さんは、しかし、すぐに続けた。

「ですが、すぐに返事をするには出来ません。職員で少し話し合ってみたいと思います。それで答えが出ましたらご連絡いたします」

5. それではここにサインを

姪の笹本和美が、家へやって来た。

「おじさん、おはよう」

「おはよう、和美ちゃん」

「今日もよろしくね」

「はい、いつてらっしゃい」

遠山は、智之と名付けられた、今はすやすやと眠っている子供にも「いつてきます。早く帰るからね」とやさしく言い、家を出て行った。実は、遠山の名が、智弘であるのだが、施設の人が、助けてくれた人の名前の一部を入れようということで、智之と名付けたのだそうだ。

やっぱり、子供を引き取ることが許可されたということを聞いたときは受話器を落として驚いた。ベビーシッターなんて子供を引き取って親になりますという人がまず最初にすることじゃない。そう思っていたからだった。まさに、青天の霹靂。ただし、自分で撒いた種である。

遠山は毎日のように終業のベルが鳴るが早いのか、荷物を整え足早に職場を去るのであった。さらに、仕事が残っているなんてことは全くなく、昼休みを潰してまでも家路を急いでいた。

はじめ、この養子の話を上司に打ち明けたときは、反対されたりもした。

「そんなに焦らなくともすぐにいい嫁さんもらえるだろうよ」
なんて言われてしまった。それは周りから見ればそう見えるかもしれない。なんでベビーシッターまでつけてそんなことをしようとするのか？最後の決め手になったのが「運命だと思った」というものだから、どうして？と聞かれても遠山は困る。

遠山は、土日、祝日が待ち遠しかった。一日中、智之と過ごせるからだった。遠山の人生という舞台に、新たな登場人物が加わったことで、この舞台がとてにぎやかになった。明るくなった。観客も増えたのではないかと思う。

それに、遠山本人が以前と変わった。数えだせば切がないけれど、今までのただ時間を過ごすだけの日々が懐かしく感じられる。でも、そんなころに戻りたいとはこれっぽっちも思わない。

和美もしつかりと働いてくれた。というよりは、遊びにきてくれた。ただ、少し申し訳ない気もしていた。彼氏でも作ってデートに行きたい年頃だのにこんなところで赤ん坊の世話をさせられる。遠山は、自分だったら嫌だと思ったから、「嫌だったら他を探すから」とかつて言ったことがあった。それには、和美は真剣な顔で、「おじさんは、周りを犠牲にしてもこの子を育てるって決めたんでしょ？ 私はその犠牲になってもかまわない」と、力強く言ったのだった。いつの間にか、和美も大人になっていたのだった。しばらく、ゆっくりと会ったことがなかったからこの大きな成長を感じないことはまずなかった。

そんな生活が数ヶ月続いた頃だった。ある金曜日の夕方頃だった。

「おかえり、おじさん、今日は早いね」

「うん、まあね。それより、智之は元気か？」

「うん、元気だよ」

和美の返事など本当は求めていなかったのだろう、スーツの上着も脱がずに智之が寝ているところへと足音を殺して行った。

ずっと、智之の寝顔を見ると安心した遠山は、

「ちょっと着替えてくるな」

と、智之の寝ている様子を緩めたあと、和美に静かに言った。

着替えを済ませて、戻ってくると、手にはケーキを持っていた。

にあったし。ちょうど会社がリストラ、リストラで自主退職者を募っていたところなんだ」

「でも、おじさんは、部長だったんじゃないじゃなかったっけ？ だったら、そんなのの対象にならないんじゃない？」

「それはどうだったか分からないよ。そんな世の中だからね」

遠山は、コーヒーを口に運んだ。カフェインが、眠気を飛ばすと感じたことがあるが、毎日飲んでいると効果がないのか、脳がきりつとなることなど全くない。初めてコーヒーを飲んだときがどんなだったかはわからない。

「それはそうとしても、仕事しないわけには行かないでしょ？」

「和美には迷惑をかけられないからな、自宅で出来る仕事に切り替えることにした」

「株？」

「まさか。経済の知識なんてないからな」

「じゃあなに？」

「コンピュータ関連の仕事」

「起業ってこと？」

「いやいや、おじさんそんなことできるように思うか？」

「悪いけど、そうは思えないね」

和美は無邪気な笑みを浮かべた。

そこは嘘でも「なんで？ やればいいのに！」くらい言って欲しかった。

「おじさん、会社が休みの日に一度、和美に智之を見てくれるように頼んだら？」

「あ、うん。2週間くらい前だったかな」

「あの時は、本当に申し訳なかったんだけど、おじさんはあの時に、他の会社の面接を受けに行っていたんだ」

「それで、採用になったのね」

「ああ。だから大丈夫。これからは、仕事をしながら智之の面倒を見ることが出来るんだ」

「すごい！すごい！」

「だからね、和美ちゃん、明日からは来てもらわなくてもいいよ。ちょっと長かったけど、おじさん決心するまでに時間がかかったってね。和美ちゃんはその時、おじさんの犠牲になっても良いって言ったけど、こんなどうしようもないおじさんの犠牲になるのはもったいないよ」

「ううん。おじさんはそんなことないよ。だって、智之を引き取って言ったんだもの。あれは間違ってた。絶対そうよ。おじさんがお父さんになって、智之もきっと幸せよ」

「そうか、ありがとう」

「でもね、おじさん」

砂糖とミルクを入れて甘くしたコーヒを一口飲んだ後、和美が言った。

「ん？」

「私も、時々、智之と会いに来てもいい？」

「もちろん」

「やった！」

おじさんにお年玉を奮発するよ、と言われたかのように喜んだ。
まだ、和美は二十歳になったくらいだが、子供っぽいあどけなさも残っていたりする。

「こらこら、嬉しいのは分かるが、あんまり大きな声を出したら智之が起きてしまう」

「あ、ごめんなさい」

しばらくじっと、二人は椅子に座って向かい合ったままコーヒを飲んでいた。遠山が帰りに買ってきたケーキは二人とも手をつけていなかったが、話が一段落したため、銀色に明るく輝くフォークを片手に、食べ始めた。

今、部屋の中は、光で満ちている。いや、部屋の中だけじゃない。遠山の未来には、光しか見えない。いや、光しか見えないどころか、まぶしくてなにも見えないくらいかもしれない。それでも、先は明

るい。遠山は、今、新たな道を歩み始めた。

「晩御飯食べて帰るか？」

ケーキを食べてしばらくしてから、遠山が言った。

「おじさん何か作れるの？」

「バカにするなよ。おじさんだって、伊達に独り暮らしを長年やってるんじゃないんだから」

「わかった、わかった。食べていきます」

和美は、ちよっとおどけたように言った。

「じゃあ決まりだな」

在宅ワークと子育ての両立は思いのほか大変なものだった。よく主婦がブログで、子育てをしながら副業でこれだけ稼ぎました、とか言っているけれど、あの掲載されている写真の笑顔の裏には大変な苦労があったことだろうと、今まで見えてこなかったものが見えてきた。

智之は、風邪を引くこともなければ、熱を出したりもすることもなく、いたって健康に、光り輝きながらぐんぐんと成長していった。気がついたら、コンピュータの本体よりも何倍も重たくなっている。このずっしりと来る重さが、自分の責任の重さに重ねあわさずにいられなかったが、日々が以前より充実したことには替えられなかった。

最近では、仕事が一段落ついたら、ベビーカーを押して公園に散歩に行ったりもしたし、一緒に買い物に行って赤ちゃん用のおもちゃなどを買ったりした。おもちゃを買ったときは、子供のようにそれで早く遊びたいがためにまっすぐ家に帰ることが多かった。

ただ、これだけ充実していてもいくつかは、不憫なこともないわけではない。

まず、赤ちゃん用品売り場に、男である遠山がベビーカーを押し

て行ったら目立つ。目立つばかりでなく、どこか、不思議な視線を投げかけられる。世間では、男女平等、男も子育てに協力しろなどと言っているにもかかわらずこういう様だから、矛盾だらけだ。

他には、母乳を与えることが出来ないから、ずっと粉ミルクであること。これがひよつとしたら何らかの発育に影響が出てきてしまふんじゃないかと心配して、遠山はその粉ミルクを自分で飲んでみたことがあった。とてもじゃないけれど、お世辞でも美味しいとは言えなかった。でも、それを智之に与えると実に美味しそうに飲む。

大人の味があるのに対して子供の味というものもあるんだろうな、と我が子のほほえましい姿をうっとり眺めながらぼんやりと考えていた。

遠山の仕事はお世辞にも順調とは言えなかった。自宅でやるぶん、好きなときに始められて、好きなときに終われるのだけれど、けじめがつかない。これくらいだったらすぐに終わるだろうと思っていた作業に5時間かかりたりすると、やはり子育てどころではなくなってくる。

でも、遠山は決めていた。

たとえば、この仕事がダメになっても、子育てはやめない、と。

その、ドロドロの鉄よりも熱い思いは、決して育児と仕事の両方を裏切ることではなく、危なっかしいながらも、遠山は順調にこなしていた。

そうして、そろそろこういう生活が1年くらい続いていた。智之の誕生日はいつだろうか？そんな疑問がふと浮かんできた頃であった。

智之を家の前で見つけたときはすでに何ヶ月か経っていたのだろうか？それとも、生まれてすぐだったのだろうか？それは現代の技術を使ってもわからないのだろうか？

結局は、法律上は智之は発見されたときが生まれた直後であるとされている。

なんの根拠もなくそうしたのではなくて、まだ臍の緒がついていたからだそうだった。

この事実を聞いたとき、胸を毒矢で射抜かれたような、そんな辛い気分になった。

遠山が、勝手に子育てをしているだけで、恨む必要もないのだが、智之の本当の母親を憎まずにはいれなかった。生まれるのを待って捨てに行った。そうとしか考えられない。つまりだ。あらかじめ捨てるのが決まって生まれてきた子供が、智之なのだ。

智之が捨てられていたことを思い出すたびにグラグラと心の中で黒いものがうねり、くねり、うなる。その黒いものは、次第に大きさを増し、心の中のあちこちに攻撃を始める。そのときの痛みがちように毒矢で撃たれたときのようなものだ。

初め、急激な痛みが一瞬走り、そのあと、ズキズキと痛むのだ。

そんなんだから、遠山は智之が捨てられていたという出来事は、智之にはもちろんのこと、自分に対しても無かったことにしようとしていた。

6. ご苦労様です

智之と初めて出会ってから2年が経った。

智之は、言葉を話し始め、歩き始めていた。

そんなことから、遠山の仕事が一とつ増えたようなもので、育児に、仕事にと一層忙しくなってきた。

昼間は、智之の相手をしていて、夜中はずっとコンピュータの画面で作業をしているということも少なくなき、外から光が漏れてきて小鳥のさえずりを聞くのも週に何度もあった。

それでも、智之の顔を見ると疲れがどこか地球の裏側へでも飛んでいくのが目に見えるかのように分かった。

あまりに忙しくて、和美がフリーな日は、極力来てもらって遊んでもらうことが多かったから、智之も「おねえちゃん」と言っていて、和美に懐いていた。

その和美は、全く嫌な顔ひとつせず、むしろ楽しんでいるようだった。

我が家に太陽が昇った。

「おじさん、智之を保育園に入れないの？」

和美が、ある日、智之が昼寝をしているときに、仕事上の遠山に「大事な話があるからちよつと時間いい？」と言って始まった会話だった。

「え？」

「だって、おじさん、忙しそうだし」

「そりゃそうだけど」

「目の下にでっかいクマ出来てるの知ってる？」

「ん？」

遠山は目のした辺りを摩った。触って分かるものではないけれど、皮膚が以前よりもハリがなくなっているのは分かった。

「頭では疲れてないって思っても体は疲れてるんだと思うわ」

「そうかな・・・」

「そうよ。それに、保育園に行ったら智之にしたって友達が出来たり楽しいと思うの」

「そうか、そうだよな」

遠山は、自分が少し単純になったと思った。これも歳をとったせいであろうか。

「そうよ、絶対そう。これは二人のためにいい結果になると思うの」
「なるほど」

「それに・・・」

「それに？」

「私ね、幼稚園の先生になるの」

「すごいじゃないか」

「うん、ありがと」

「やっぱり和美ちゃんはベビーシッターなんかよりもそれを最初からやりたかったんじゃないか？ごめんな、最初の頃、拘束しちゃって」

「ううん。あれもいい経験になったし、こうして、智之とも仲良くなれたし、私は後悔しているどころか、名残惜しいくらいよ」

「そうか、それならよかった」

「だからね。あんまりここに来られなくなってしまうと思うの。智之を保育園に入れるとしたら今年の春からでしょ？私もちょうど今年の春から働き始めることになるからそれまではここに来れるけどね」

「いやいや、そんなに何度も来てもらっちゃ悪いよ」

「私は、おじさんのためにここに来ていたというのもあるけど、やっぱり智之のことが心配だから。それに、おじさんがこんなところで倒れてしまったら大変だからね。智之のためにも無茶しないでよ」
「はいはい」

和美が言いたいことを言い終えたと思ったら、智之が起きて来た。

「ああ、起きちゃったのね」

ちよっと声が大きかったかもしれないと遠山は若干ながら反省していた。

どうも、和美と話をするとき、声を大にして騒ぐようなことが多いような気がしていた。

でも、どれもこれも、智之に対する話題で、だからこそ、二人とも真剣になる、そのためなのだ。

一旦、ここまで！と目標を定めると案外大したものではなくて、遠山は時々ふらふらの頂点に達することはあったが、その山の向こう側へと転げ落ちていくようなことはなかった。

その勝因は、智之の存在が大きかった、と言いたいところではあるが、和美の協力のおかげであることは決して忘れてはいけなかった。

遠山の仕事のほうは、顔を知らない仕事仲間が増えたり、仕事の依頼が多くなったりしていた関係で、智之が保育園に行くというのは以前考えていた、ちよっと寂しくなるんじゃないだろうか？というようなある種の悩みを吹き飛ばし、助かる、と反対のことを考えていた。

気がついたら、朝、和美に今日は来られるのかどうか電話をする回数も多くなっており、智之に構ってやる時間が十分でないことを露呈していた。

和美は、そんな遠山に対して、文句ひとつ言うことなく、笑顔で玄関に現れた。

遠山は、本当は毎日でも来てほしかったが、表面上は、今日は大丈夫なのか？と繕っていた。和美はそれを知っているのか、知らないのか、分らないが、そんな探りを入れる暇すら、もはや遠山には残されていない。

遠山の仕事部屋からは、ハムスターの回し車のように忙しく回る

コンピュータのファンの音と、キーボードを叩く音が響いていた。

休日は、仕事を休みにする

これは智之が保育園に行き始めてから、和美が幼稚園の先生になって遠山の家へ以前のように頻繁に来なくなってから遠山が決め事として自分に課したものだ。

人間、口で言っただけでは聞きそうにないということを重々承知であるので、達筆なフォントで描かれたその文字をコンピュータからプリントアウトして壁に貼っておいた。

そんなわけで、週末になると、土日休みにするために、金曜日は徹夜同然で自室に籠りつきりだった。もちろん、智之を寝かしつけてからのことであるのだが。

金曜日のオールナイトワークを終えたら智之と遊ぶ時間が待っている。これは、なにより仕事の疲れをはるかかなたへ葬り去る力を持っている時間だ。この日ばかりは、遠山のコンピュータも暇をもたえられる。

朝から、朝食を作り、あまりに智之が起きて来なければ起こしに行く。

「こんな年齢から、寝坊癖をつけちゃならんからな」

とか、なんとか智之にぼそりと言うのであった。

「おとふおさん、ふおふあよお」

と、眠い目をこすりながら、パジャマが乱れた智之が起きてきたところから、遠山の休日は始まる。

二人で、トーストと目玉焼きのごく普通の休日の朝食を済ませる。

このときに、智之は、平日ほとんど遠山に話すことが出来なかった、保育園でのあれこれを「あのね、それでね、えっとね」と所々で呼吸を整えつつ、興奮しながら言うのだった。

「これぐらいの年齢の子は、あったことを全部、親に話したいものらしいの」

「ほお、そうなのか」

「それでね、ただ聞いているだけじゃダメ。ちゃんと反応してあげないと、おじさんの会社の部下の社員さんたちよりも敏感に、お父さん聞いてないな！ってのが分かっちゃうみたいよ。だからね、智之と遊ぶときは仕事のことは忘れて、ちゃんと接してあげなきゃダメ、いい？」

さすが、和美は幼稚園の先生になっただけあって、子供取り扱いスペシャリスト的な感じになっていた。

その他にも、目を見て話せたの、視線を合わせろだの、色々と注文を加えていた。

「ちよっと待って、メモ、メモ・・・」

「もう、メモなんかしないで覚えなよ。仕事のマニュアルじゃないんだよ？」

「そうか、すまんすまん」

遠山は、和美とのやり取りを思い出しながら、決してメモを見ながらではなく、智之の話に耳を傾け、いいタイミングで「おお、すごいじゃないか！」「やったな！」「それで、それで？」「今度はがんばろうな！」などとコメントするのだった。

そのコメントを聞くと、智之はだんだんと笑顔になって、一週間、溜まりに溜まったよかったこと、がんばって出来たこと、先生との話、友達の話、悲しかった話など、なんでもやった。

この様子だと、近所の居心地のいいところで「あらやだ、こんな時間」というまで噂話や、いい店紹介、他人の話、子供の話に花を咲かせる主婦と同じくらい話し続けそうな勢いだ。

「いい？退屈しても、絶対に話を切ったりしたらダメよ？」

そんな和美の忠告は全く不要だった。

だって、本当に楽しそうに話をしている智之を見ると、どんな面白い漫才を聞いているよりも面白く聞こえたし、興味深かった。遠山の知らないところで、智之はこんなに成長したんだ、なんて他人事みたいで親失格だろうか？

休みごとに、テレビを見たり、買い物に行ったり、動物園に行ったり、水族館に行ったり、ゴールデンウィークにはちよつとした旅行に行ったりしたのだけれど、ほぼ毎週欠かさなかったのが、公園に行くことだった。

公園は、家からぎりぎり歩いていけるくらいの距離にある。実際、遠山1人だったら自転車かミニバイクで行くだろう。

砂場と広場、ブランコ、滑り台、ジャングルジム、鉄棒があるくらいのもどこにでもあるような公園。ベビーカーのときに時々行った公園。そこに行けば、智之の友達がいた。

せっかく智之と二人で過ごせる時間なんだから、いつでも遊べる友達と遊ばせるのはどうなのか？と自分に問いかけてみたことはあったのだけれど、このポカポカとした陽気の中、ベンチに座って、楽しそうに遊んでいる智之を見ながら本を読む時間も格別だった。

こんな遠山を智之は嫌っているはずもなく、綺麗な花を見つけてはそれを摘んできて、遠山の横に並べたりする。

またあるときは、ブランコを後ろから押してもらって楽しむこともあった。

「こ、怖いよ、お父さん」

最初は、加減が分からず、智之にしては力いっぱい押されて、ブランコが飛び出してしまったのだった。

「おお、ごめん、ごめん」

と言って、駆け寄った遠山の腹に智之はダイブしてきた。

ドスン

実に久しぶりの尻餅をついた瞬間だった。
智之はそれを見て笑っていた。

本当に、時々であつたが、遠山は、夕方に智之を公園に連れてくることもあつた。

夕方に公園に行ったら、いつも若奥様といった感じの新米主婦達がたくさんいた。

子供達が遊ぶのを見ながら彼女たちは話に花を咲かせるのだった。終いには、子供達が、「ねえ、ママ、帰ろうーよー」と言うまで話し込んでいたのだった。

そんな夕方の公園に数えるほどしか足を運んでいないときだったが、本を読んでいる遠山に新米主婦達が恐る恐る近づいてきて、話しかけた。何か、機嫌を損ねたら怒って襲い掛かってくる肉食獣にでも近づくかのように。

「あの、智之君のお父さんですよね？」

それ以来、夕方の公園に行くと、主婦達に混じって主夫が話に参加するようになっていた。最初こそ、お互いがどんな会話をすれば良いのか分からなかったのだけれど、なんというか、飛行機が離陸してからのように何気なく、当たり前のように、話が軌道に乗る。そのあとは、主婦と主夫の垣根を越えてのおしゃべり大会が始まる。何度か、智之が「お腹空いた」という言葉で静止に入ることもあった。

遠山がこの主婦たちから得た一番大きなものは、料理だった。

今までは、スーパーでコロッケを買ってきたり、ハンバーグを湯煎したりと、いわゆる、シヨボイものしか出来なかったが、アドバイスの成果もあり、智之が「うん、まあまあかな」と偉そうに言うまでになった。

そんな、楽しい毎日を過ごしていても気になるのが仕事のこと。

専業主婦だと主婦業だけで済むし、パートをやっていたとしても、時間になれば帰ってこられるから、自分の生活に合わせて働くことが出来る。

一方、遠山は、仕事の依頼がまちまちで、暇なときと忙しいときの差が激しい。これも承知の上であったが、やっぱり生活のリズムが一定しないと体が辛いようだった。

保育園に迎えに行く時間は、基本的には、夕方すぎ。でも、暇なときは保育園の終わりのお遊戯を見に行くことすらあった。

ようするに、それくらい一定していないのだった。

ただ、一定していないくらいなら別によかったのだ。

7. 何が届いたのかな?・・・ん?

6月の下旬頃になって、相当暑かった。部屋の中は冷房をかけなければボイルされてしまいそうな状況。智之もあまり外に出たがらなかった。

遠山は、それはそれで好都合だった。

「子供なんだから外で遊ばなきゃ」

と和美が来たときは、智之は無理矢理、灼熱の大地に駆り出されていたが、和美が来ないときは、冷涼天国とも言えそうな部屋で籠ってテレビを見たり、絵を描いたりしていた。

絵が描けると智之は遠山のところに嬉しそうに持って来た。遠山はそれに感想を言ってやることは出来たが、遠山が絵を描くところを横でじつと見ているというような時間はなかった。

ちょうど仕事の依頼が増えてきて、暑さなど気にしていられないくらいになっていた。

遠山は、ここ最近で、もっと融通の利く仕事なのかという今までの期待は無残にも葬り去られてしまったのだった。

仕事の量が増えてくると本当に猫の手でも借りたいくらいで、ストレスもだんだんと募ってきた。

それでも、保育園がある平日は、それなりに智之の面倒を見ればいいだけなので、なんとか過ごすことが出来た。土日は、和美が来てくれると楽で、時々小遣いもやった。「もう子供じゃないんだから!」とか言いながらちゃっかりもらっているところが和美らしいと言え、和美らしい。

しかし、問題は、和美が来ない土日。

仕事は終わってもいないのに、次から次へと舞い込んでくる。

顔は見えないが、仕事仲間の頼みとあらば断れない。別に断ってもいいか、と断ると、他はいくらでもいるわけで、結局、自分のところに来てくる仕事はほんとうに来なくなってしまうと、その仲

間達が教えてくれる。

それにしても、やってもやっても仕事が終わらない。

「カーッ」

と思わず叫んで頭を掻き毟ったら白い「ふけ」が降ってくる。

もう何日、シャワーすら浴びていないだろうか。

そんなこんなで、仕事が終わらないのと、体が痒いので遠山のストレスはもうすぐ頂上に辿り着きそうだった。

もともとこの山はそんなに高くない。それに休火山だ。いつ爆発するか分からない。

で、爆発してしまったのだった。

もうあと1週間我慢すれば子供達は夏休みに入るという頃。

もちろん、夏休みに入ったからと言って何か今の状態が変わることはない。むしろ、ありがたいことに、保育園も盆の時期まで普通通りやっている。

仕事で忙しい何度か目の土曜日の昼過ぎのことだった。

和美が来ていなかったが、今まで大人しく1人で冷涼天国で遊んでいた智之が仕事部屋へやってきた。

「ねえ、お父さん、公園行こうよ、ねえ、ねえったら」

「ちよっと待っててな」

「もう！ずっとそれじゃん！」

「いいから、待ってて」

「もう、まゝてゝなゝい！」

「もうちよっとだから」

「もうちよっとって何秒？」

「もうちよっとは、もうちよっと」

数秒置いて

「ちよっと待ったよ。ねえ、まゝだ？」

「まだ」

「ねえ」

「まだ」

「ねえ」

「まだだ」

「ねえったら」

「まだ」

「ねえ！！！！！」

「うるさいな！父さんは仕事してるんだ！遊んでるんじゃない！独りで遊んでろ」

遠山は、コンピュータの画面に向かったまま、叫んだ。

後ろから、泣き声は聞こえてこない。

「ケチッ！」

そう聞こえただけ。バタバタという怒りの籠った足音を立てて、智之はどこかへ行ったようだった。

再び、遠山の仕事部屋にはコンピュータのファンの音とキーボードの音だけが聞こえるある種の静寂が舞い戻った。

気がついたら、数時間経っていた。

こんなことコンピュータに向かっていたらざらにある。かなり集中しているからだ。

だから別段なにも考えていなかった。

ちよっと仕事が一段落し、コーヒーでも淹れようかと立ち上がり、うーんと背伸びをしたとき、家の中が妙に静かなのに気づいた。

自分の仕事部屋は、さっきまでうるさかったコンピュータのファンがコーヒーブレイクに入るところで、忙しそうなのはエアコンだけ。

部屋の外からは足音ひとつ、ため息ひとつ聞こえない。

「はっ！」

実際に、そう言ったのかも知れないし、そうでないかも知れない。

このときの遠山にその是非を判断することは出来なかった。

今度は、遠山がバタバタと音を立てて部屋から飛び出し、短い廊下を走った。

つい、数年前までただの洋服用の倉庫のように使っていた部屋、そこに向かって壁にぶつかり、本棚の角に足の小指をぶつけ、花瓶に手が当たり、床に落として壊して、それでもなお、その部屋に向かって急いだ。

「智之！」

バン！と外開き扉を内側に開こうとして大きな音が鳴った。返事はない。

今度は、ゆっくりと扉を手前に引いた。

部屋の中には、遊びかけのおもちゃが散乱していた。

そのほかには、絵本がたくさん入れてある本棚、ベッドがあるくらしいの部屋。

ベッドには大きな白熊がいるが、智之はいなかった。

エアコンが、風向ルーバーを忙しく上下させ、扇風機が智之はここにはいませんよとばかりに左右に首を振っている。

部屋は、それなりに涼しかったが、遠山は、寒くなった。

体のそこから湧き上がってくる、なにか、冷たいもの。

足元がぐらつくような、気持ちの悪い。

でも、そんなものに負けて、ここにへたれこんでいる時間はない。脳よりも先に体がそれを分かっていた。

エアコンも扇風機もそのままにして、外開きの扉を押して部屋を出て、床に水を含んだまま横たわっている花と、その辺りにちりぢりになっているガラスの破片を、お世辞にも軽いいえない足取りで飛び越え、壁に肩をぶつけながら、玄関へと向かった。

遠山がさっきまでいた部屋では、まだエアコンは自分の仕事を続けているし、扇風機は首を振り続けている。

靴を履いたか履いていないか中途半端な状態で家から飛び出したから、その瞬間にこけた。手を突いたからよかったが、放っておいたら顔面強打というところだった。

こんな状況でも、自分の危険を回避するだけの余地は残っているようだった。

これが幸いして、携帯電話と自宅の鍵を忘れて行かずに済んだのが救いだっただろう。

遠山は、エレベーターのボタンを押したが、すぐにその脇にある階段で駆け下り始めた。

駆け下りるといふよりは、もはや、転がっているような状況で、途中何人かの人とすれ違ったが、その人たちがビックリしたかどうかを確かめる間もなく、余裕もなく、エレベーターよりも早く地上に到達したような感じであった。

そして、そのまま、マンションの玄関から飛び出し、いつも、智之と公園に行くときのコースを通りながら智之を探した。

「智之！智之！智之！」

声は大きかったのだが、震えていた。今にも泣き出しそうな声だった。

「ウチの智之知りませんか？」

と見ず知らずの人にいきなり話しかけたりもした。

「え、あ、う・・・知りません」

と相手がたじろぐと、ハッと自分の狼狽ぶりに気づいて

「あ、すみません」

と謝っていた。でも、それは形だけで、何度も何度も同じ事を繰り返していた。

途中、ゴミ箱のふたを開けたり、ポストの下を覗き込んだり、バ

ス停のベンチの下にかがみ込んだり、コンビニの中に入ったり、智之がいそうな所から、絶対にいないであろうところまで隈なく探して、探して、探して、探して、探して、探して、探して、探して、探して、公園まで辿り着いてしまった。

公園に着いたときは、日の光が橙になっていて、土曜日であるのに、主婦達が話に花を咲かせていた。

遠山は、物凄い剣幕で主婦達に近づいて行った。

「うちの、ぜえぜえ、はーはー、智之、ごほほこ、知りま、ひーひー、せんか？」

「ええ？」

「智之君どうかしたの？」

「いなくなったの？」

「ええ？」

「どうして？」

「あなた何してたの？」

「どこか心当たりは？」

「本当にいなくなったの？」

「みんなで探しましょ」

「そうね」

「すぐ見つかりますよ」

「きっとそうですよ」

遠山が何も答えないままに流れる汗のように、話は次々と進み、主婦達で探してくれることとなった。

「探しましょう」と言ったことから、ここには智之がいないのであろう事がわかる。

遠山は、その場に崩れ去ってしまいそうな状態だった。

でも、何か、遠山の中の何かが、そうはさせなかった。

滑り台、ジャングルジム、砂場、ブランコ、木の茂み、草の陰、花壇の裏、ベンチの下、本当にどこでも、探した。探しに探した。

無常にも、太陽は地平線にむかつてまっしぐらだった。

次第に主婦達の顔にも焦りが出てきた。
気がつけば彼女たちの子供も「ともゆきく〜ん」と一緒に探してくれていたが、智之は見つからなかった。

数十分探したが、公園には智之はいなかった。

だんだんと日も暮れかけてきていて、辺りが薄暗くなってきた。

「きっと、智之は、どこかで泣いてるんだ。俺が、俺が遊んでやらなかったから・・・」

遠山は、泣きながら叫んだ。

「大丈夫よ、ね、遠山さん、しっかりして、大丈夫だから」

「警察にも探してもらうように言ってきましたから、すぐに見つかりますよ」

主婦達は代わる代わる慰めてくれるが、どこか他人事だという気がしなくもなかった。

実際にこのことが我が子ならもっと心配して、狼狽しているだろうに。

「みなさん、すみません。警察にも連絡してくださって・・・」

「いいのよ、困ったときはお互い様よ」

遠山は心のどこかで解決してからその言葉を聞きたいと思った。

「すみません。今日は、ありがとうございます。私、まだ探しますが、みなさんはお帰りください。子供達もいますし」

「そうね、申し訳ないけれどそうしましょう」

と、あっさりと一人が言った。

主婦達が帰って、それと入れ替わりくらいに感じのいいお巡りさんがやってきた。

幸いにも？あのとのおじさん、服部さんとは違う人だった。

「落ち着いて」

そう声を掛けてくれた。

「お父さんは家で待っててください。智之君が帰ってくるかもしれないから。外の搜索は我々に任せてください」

「あ、すみません、お願いします」

遠山は、頭を下げて、無線で仲間と連絡を取り合うお巡りさんを置いて公園を後にし、自宅へと向かった。

いつもにも増してオートロックの扉が無表情で、味気ないものに感じられた。

開かずに、智之が見つかるまで帰ってくるなど言ってくれるほうがマシだった。

遠山がドアを通り抜けると、そのほかに誰も通らぬまま、ドアは閉まった。

階段で登る気力はなく、エレベーターを呼んだが、なかなかやってこなかった。

その時間がやけに長く、無駄に感じられたし、ここにこうして、じっとしている自分が憎らしくもあった。

ふと、外を見ると、西日が強く差し込んでくるくらいで薄暗かった。

エレベーターがやってきた。

エレベーターの中はやけに涼しく、そして、明るかった。

エレベーターは遠山を載せるとそのまま垂直上昇し、命令通り6階で止まる。

そこで、遠山は降りた。

後ろで、扉が閉まり、エレベーターは下へと向かっていった。

こんなにも、エレベーターから部屋までの廊下が長いと感じたことはなかった。

まだ、曲がり角にも辿り着かない。

部屋の中に智之が帰ってきているなどまずありえないから、そんな希望を抱いて一目散に廊下を走り抜けることは出来なかった。

曲がり角を曲がるとき、ふと、部屋の前にダンボールが置いてあって、その中に智之がじっと静かにいてくれたらどんなにいいだろう。どんなに気持ちが落ち着くだろう。と、そんなありもしないことを考えてしまっていた。

しかし、曲がり角を曲がった瞬間にその希望はブラックホールにでも吸い込まれたかのように消え去った。

トボトボと廊下を歩き切り、部屋の鍵を開ける。

カチャリ

ドアノブを引っ張ったが開かない。

もう一度、引っ張った。

それでも開かない。

「おかしいな・・・」

鍵を再び差し込んで回す。

カチャリ

ドアノブを引っ張るとドアが開いた。

「鍵をかけてなかったのか・・・」

小さな独り言を廊下に残し、遠山は部屋の中に入ってしまった。

部屋の中はやけに涼しかった。玄関から入ってすぐに見える仕事部屋の扉は閉まっている。

リビングのエアコンは動いていない。

だとすると・・・。

やっぱりだった。

粉々になった花瓶を跨いで、辿り着いた、今はいない智之の部屋の扉が開きっぱなしになっていた。

「やっぱり・・・」

別にこんなこと分かったってどうでもよかった。

電気代が気になるとか、そんなこと、本当にどうでもよかった。でも、なんとなく、ベッドの上においてあった、リモコンを手に取り、エアコンに向かってボタンを押す。

ピッという音とともにエアコンは運転を停止し、風向ルーバーを元の鞆に収めにかかった。実にゆっくりとしたモーションで。

次に、遠山は、扇風機のボタンを足で押した。

扇風機は次第に、首振りの速度を落とし、プロペラの回転も落としていた。

そのまま、扇風機のプラグを抜こうと屈んだ。

普段は、プラグなど差しっ放しにしておくのだが、遠山は、別に理由もなく抜こうとしたのだった。

「と・・・」

「智之!!!!!!!!!!!!!!」

コンセントがベッドの足のところにあったため、そのプラグを抜こうとして屈んだとき、ベッドの下でスヤスヤと、冷涼天国で眠る智之を見つけたのだった。

「こんなところにいたのか・・・」

「迷子になって、見つかったても、絶対に怒っちゃだめだよ。そんなとき親も辛いかもしれないけど、子供だって寂しかったんだから」

「じゃあ・・・?」

「静かに抱きしめてあげればいいの」

なんて、和美が以前言っていたことを思い出したが、どうも、今

回は、抱きしめないほうがよさそうだ。

「お父さん、か・・・」

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9436g/>

コウノトリの置き土産

2010年10月8日15時52分発行